8ミリ 映画をつくるすすめ

滝本泰三

映画館で映画を見たり、うちでテレビをみていると、自分でこんなものがつくれたらどんなに面白いだろうと考えてみたことがありませんか。

勿論映画やテレビの制作には何人ものプロと莫大な費用、機器が必要です。

多くの家庭に電気冷蔵庫やテレビがほとんどみられるこの頃、その程度の費用で、自分の手で映画がつくれるとしたらどうなさいます。

フイルムは消費しますが、消費文化どころか、映画をつくるという、とてつもない創造の喜びに日夜うつつをぬかし精進されること間違いありません。

アマチュアが映画をつくる等とは思いもかけぬことと一部の連中がやっているのは旦那（だんな）道楽だよと片付けられる方もありましょう。

上手、下手はともかく、可愛いいわが子の姿（動くのですぞ）や父母の日常、旅の記録をフイルムに残しておくことはどのように意義深いことかは申すまでもありません。

人間の生涯の中でも出産、入学、結婚式などのフイルムは何年たってもそれをみる時の喜びは変りません。

さて具体的に何と何があれば映画が出来るか御紹介しましょう。

まず撮影機、この頃マガジンポンでお馴みのようにフイルムをほりこめばあとはシャッターのボタンを押すだけ、いうならば馬鹿でも写せる……といわれています。

F社の八ミリ機（一万八千九百円）

次は映写機が必要です。これも撮影機同様オートロードと申しましてフイルムの先をさしこんでやるだけで、あとは自動的に装てんされ画が写るという仕組みです。

F社のM1（一万六千五百円）などが価段も安く安定しています。

もう一つ要ります、それはフイルムを撮影したままだと失敗や他人に見られたくないような変な顔の写っている部分（カット）を切りとりたいようなときに使います編集器（スプライサー）です。（千三百円）

撮影機＋映写機＋編集機（三万六千七百円）

これだけで立派に映画が自分の手でつくれ家族は勿論大勢の方々にも楽しんでもらえるというわけです。

吾々の手でつくる映画にどんなテーマがあるかを考えてみましょう。

まず子供をテーマとした場合考えられるのは、ハイハイからヨチヨチ歩き、お誕生日、七五三の宮参り、幼稚園での運動会、貝掘り、芋掘り、遠足などママのカメラマンで失敗なく美しいカラーに出来上ります。

小学校の入学前後（ランドセルをデパートであれこれ選ぶところから新しい帽子、服に着飾ったママと一緒に出かけるところ等、）そして学校の行事、旅行等、子供の成長の記録は果しなく続いて撮りだしたらきりがない程沢山あります。

幼い頃の記録程貴重なものはないでしょう。

その他、ドライブの思い出やハイキング、キャンプ、渓谷の紅葉、逆光に光るすすき、夏の海水浴、各地の郷土色豊かな祭りなど全く限りがありません。こんな楽しい中にも一つタブーがあります。それは、わが子や奥方だけが出てくるものを他人にみせてはいけないことです。第三者にとってこれ程つまらなく興味のないことはないからです。しかし作品として形も整い映画として立派なものはどしどし発表なさることです、そして批判してもらっているうち腕もあがり、楽しみは倍増するわけです。

（熊本高校教諭）

新入社員

金井光子

三月という月は、あらゆる生きものが長かった冬からやっと顔を出して、春の息吹きに目をさます季節であるが、人生の中でさまざまの絵巻物を繰り広げるのもこの月である。喜びあうもの、悲しむもの、帰郷するもの、古里を離れるもの……。それらの渦の中でひときわ美しく匂うのは、会社の中でちらほらと見かけるセーラー姿の新入社員である。彼女たちと擦れ違うと、そっと声を掛けてやりたいような衝動にかられる。

ところが昨年のことである。私の店に高校を卒業したばかりのA子を、知人の世話で住込み従業員として迎えた。A子はとても会釈が良く、なにお言われても「ハイハイ」と歯切れのよい返事をし、店中明るい雰囲気が流れ、私は店の仕事はもちろん、コーヒーの入れ方から手を取るように教えてきた。やがて、従業員の初等科の教育に一週間ほど通わせ、いくらか自信がついてきたので喜んでいたら、BGにとって一番うれしい五月の飛び石連休がやってきた。昔なら商店に休日などはなく、祭日休みなどもってのほかだったが、週休制が唱えられ、店主は年中無休でも、従業員は週一回休ませるので、その点にはなんら問題はないけれども、普通の商店にはまだ祭日休みはない。私の店も休んだことはなかったが、あまり祭日が続くので、その中の一日だけ休暇をやった。すると、折角やった休暇が逆効果となり、次の日、土曜なのに誰も出勤しない。さては、皆でなにか企んだのかな？　とよからぬ事を想像している矢先、新入社員のA子がのこのこ帰ってきた。時計を見ると、九時をとっくに過ぎている。高鳴る胸をせいいっぱい押えて理由を尋ねると、なんでもなかった。母が風邪気味だったので、引き止めたということだった。初めて職場に送る母親の子どもに対する態度の甘さに失望した。それまでは良かったが、しばらくしてA子の言葉が急に荒々しくなり、

「私は十三時間働いているのですよ、そんなに遅いなんて、言わないでいいでしょう」

と言った。私は、思わず息を呑んだ。今までの興奮が一度にさめて、冷静に返って考えた。「十三時間！」A子は、どこからそうゆう数字を出したのだろう。朝、目をさまして、下へ洗面に来るのが八時として、夜、店のシャッターを下すのが九時だから結局その間を言うのであろう。よく計算したものである。実際は九時に仕事に始めて夜六時に一応仕事のかたをつけ、夜は自由にという事で入社させたのであるが、住込みの場合、食事時間も、化粧の時間もみんな就業時間に計算しているのでかなわない。特に、女性はデリケートなので、私などは住込み従業員に対する食事など、主人のより気を使ったつものである。その後、A子は急に居づらくなったのか、次の日曜に帰郷したまま店に顔を出さなくなった。

私は新入社員を見かけると、A子をふっと思い出す。入社当時の清純な姿が忘れられないからだ。

（詩人）

"信号無視"

堀一夫

歩行者が信号を守っていてさえ、はねとばされたり、ひき殺されたりする今日、歩行者が信号を無視すれば道路交通法違反で罰せられるのは勿論、それより先にいのちの方があぶない。

しかし信号にわずらわされない道路があれば、歩行者もドライバーもどんなにかたのしいことだろう。

歩道橋の誕生は一種の信号無視で、車の流れにおかまいなく歩行者は横断出来る。まことに結構なようだが、高い階段の上り降りという代償を払わねばならない。

貧乏国の道路行政では、車が上り降りして人間が平面を歩くということは、遠い夢かも知れないが、その方向で努力すべきだと思う。

とにかく日本の現実はかくのごとく、歩道橋のないところでは横断中の事故があとをたたない。

ところがアメリカに着いておどろいたことに、歩行者で信号を守るなどという連中は滅多にいない。日本で信号は守るものと習慣づけられた私が赤信号で立止っていると、いつの間にか一人ぽっちにされてしまう。一度は立止った人達も車の流れがとぎれると、赤信号であろうとおかまいなしにどんどん渡ってしまう。勿論その途中で車がやって来ても車はおとなしく停止して、この無法者達のお通りをしずかに待っている。

なるほど正に歩行者優先であり、歩行者の信号無視ぶりに王様の風格がある。

そうなると車が通らないのに赤信号だからと待っているのは、いかにも間が抜けてみえてくる。先ずはお上りさんというところであろうか。

そこで私も卒先して赤信号突破をやることにきめた。土地っ子のような顔をして信号無視の先頭に立つのは、日本では出来ないことだけに一寸愉快である。

しかもこの傾向はサンフランシスコからニューヨークへと東海岸に近づくにつれてはげしくなる。ニューヨークの五番街の雑踏ぶりはひどいが、歩行者達は老若男女とりまぜていつでも集団で赤信号無視である。

街角におまわりさんが立っていようがいまいがおかまいなし。おまわりさんだってそれが当り前のような顔をしているから面白い。

この傾向はロンドンでもパリでも同じであった。とはいっても、パリ野郎の運転ぶりは気狂じみたのが多いから、アメリカほどにはのんびりと信号を無視して歩けない。

ドイツに入っておどろいたのは、ここでは信号無視組と信号遵守組とがはっきり分れていることである。車がとぎれると赤信号でも渡る人もいるし、平然と青になるのを待つ人もいるといった工合でお前はお前、俺は俺と主体性がはっきりしている。

渡る連中はアメリカナイズされた奴で、断固として立っているのは頑固なドイツ人気質ということでもあろうか。

ドイツは南から北へ、つまり都会化が進むにつれて街の様子はアメリカナイズされてくる。しかしこの気風だけは変わらないのも愉快であった。

やはり歩行者は王様である。

勿論これらの国で人身事故を起こせば先ず一生かかっても払いきれないような賠償金がかかってくることは間違いなく、ドライバー達はこの現実を身にしみて知っているからだとしても、日本のドライバーとはあまりにも違いすぎる。日本でも歩行者の信号無視が事故につながらない日は来るのだろうかと思う昨今である。

（熊本大学教授）